

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済 日銀支店長 見聞録」

[掲載日] 2018年2月23日

[テーマ] 上野三碑—多胡郡の経済力 象徴—

先月、上野三碑を訪れた。最初に足を運んだ山上碑では、ボランティアの方から熱心かつ詳細な説明を受けた。マスコットキャラクターを交えた子ども向けパネルや分かりやすいパンフレット、多胡碑記念館のディスプレイの助けも借りながら、それぞれの石碑を見ていると、1300年前の生活・宗教・経済・政治のありようを語りかけてくれるようだった。

ボランティアの方の説明の中で印象に残ったのは、三古碑が、当時、戦略的に重要な場所であった古代多胡郡に存在している、という点であった。8世紀頃の多胡郡は、窯業や布生産で有数の一大手工業地帯であったこと、そして、朝廷は東北地方の計略を進めており、多胡郡の経済力がその財源に充てられた可能性があったことを知った。上野国は蝦夷政策を進める上で、兵士動員や農民の移住、物資の供給や運搬で重要拠点であり、そうした中で多胡郡が新設されたようだ。

当地の地理的好条件が経済力と結びついていた、という話は、もちろん今にも通ずる。本県の現在の産業集積や、工場立地件数の多さ（2015年、16年とも製造業等の工場立地件数は全国第3位）の背景には、交通の利便性や恵まれた自然環境がある。

上野三碑の歴史的価値の高さは、昨年10月にユネスコ「世界の記憶」に登録されたことから明らかである。群馬県のウェブサイトで今月公開された、ユネスコ本部へ提出された登録申請書の基となった文書を読むと、三碑の重要性が多岐にわたっていることをあらためて認識した。訪れた多くの方が、三者三様の視点でこの一級史料の魅力を味わっていただけるとは違いない。

日本銀行前橋支店長
岸 道信